

シンポジウム 2-4 (インプラント)

マイクロスコープはインプラント治療を高めている。

いつでも、どこでも、誰でも。

柴原 清隆
柴原歯科医院

歯内療法を中心としてマイクロスコープが歯科に臨床応用されるようになって久しいが、インプラント治療における報告は少ないのが現状である。私は日常臨床の大部分をインプラント治療で占めており、次のような考えを元にマイクロスコープ診療を取り入れている。

「いつでも」: 診査・診断から外科、補綴処置、メインテナンス、そしてトラブルシューティングに至るまで全ての治療ステップを拡大ルーペは使用せずにマイクロスコープのワーキングビュー下で行っている。インプラントのサイトプレパレーションは拡大と適切な照明下で行うと正確性が向上する。また私はスマートインプラントコンセプトとフロムザボトルコンセプトという2つの骨造成の考えを持ってインプラント臨床にたずさわっているが、マイクロスコープを使用することで自家骨の採取・メンブレンの設置などの手技そのものの精度と臨床成績を上げることができると思っている。更には上顎臼歯部のインプラント治療では必須である上顎洞骨移植術の側方アプローチと歯槽頂アプローチ時の2つの手技もマイクロスコープ下に行うことが可能である。歯槽頂アプローチへの応用は多くのマイクロスコープユーザーの報告があり、その有用性は周知のところであるが、私は側方アプローチこそマイクロスコープの真価を発揮できると考え、低侵襲で開窓など全てのステップを行う手技を **MICRO** 誌上で報告したのでその一端をご紹介します。ここで重要なのはマイクロスコープ下で使いやすい器具の選択であると言えよう。

「どこでも」: 外科医にとって手術環境は臨床結果も左右しかねない大きなファクターである。そこで同じ機種のマイクロスコープがあれば視度調整・眼幅調整、関節部の調整さえすればユニットが変わっても、また出張時でさえ自院と全く同じ環境でインプラント治療が可能でありこれは非常に大きなメリットである。また、インプラント診療において術者以外の手を借りずに視野と同じ画像を同時記録できることはとても有用であり、マイクロスコープは今や必要不可欠な診療器具だと断言できる根拠となる。個人情報保護に留意しつつその記録はどこでも閲覧でき、自身のインプラント治療の向上のみならず後進の教育にも効果的である。マイクロスコープは術者自身をまだ見ぬ臨床技術のはるか彼方までどこまでも誘うコクピットであると言えよう。

「誰でも」: マイクロスコープを日常臨床に取り入れる際の障壁であり、後々大きなメリットとなりうるのがポジショニングである。自分に合った診療姿勢を構築し、やがて来る「マイクロスコープの壁」を乗り越えることができれば誰でも全ての治療行程でワーキングビュー下に診

療を行うことができるようになると考えている。マイクロSCOPE診療の教育は諸子百家の考えがあるが、重要なことは誰でも使えるようになっていることである。

本講演により全ての臨床家が明日から全てのインプラント診療をマイクロSCOPE下に行いたいと少しでも感じて頂ければ幸甚である。

2000年 長崎大学歯学部卒業

2000年 佐賀医科大学口腔外科勤務

2006年 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科卒業

2009年 医療法人立山勤務

2010年 花等歯科医院勤務

2014年 柴原歯科医院太宰府インプラント研究所開業